様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２８３５

研究課題名（和文）学習者中心の授業づくりを妨げる授業観の解明とその変容を促す研修方法の開発

研究課題名（英文）Elucidation of the views of university faculty members who are not oriented toward learner-centered teaching and development of teacher training to change their views

研究代表者
関田　一彦（Sekita, kazuhiko）

創価大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２４７２７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、アクティブ･ラーニングの普及に伴う学習者中心の授業改善に際し、当事者である教員が持つ教育観や授業に対する考え方に着目し、授業観の構造の解明を試みた。まず、学習者中心の授業改善に向かう授業観尺度を作成し、その構成要素を検討した。さらに、教員へのインタビュー調査により、その要素間の関係を質的に探り、作成した尺度の内容妥当性を検討した。最終的に、パス解析を通じて教員の学習者中心志向の授業観に対し、「変化への抵抗感」「支援受容感」「固定能 力観」「授業効力感」の4つの下位尺度を特定し、その影響関係を確認した。こうした授業観の違いを踏まえた教員研修の必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アクティブ・ラーニングに象徴される学習者中心の授業改善に向け、どのような授業を良しとし、どのような教育成果を求めるのか、教員の授業観・教育観が大学教員の授業改善に向けた態度に与える影響が明らかとなった。これにより、授業改善に関するＦＤ研修を企画・開発する際に留意すべき点が示された。また、大学教員の授業観を測る尺度が作成されたことにより、学部や大学ごとの授業観の比較や、研修前後の変容を量的に把握することができるようになった。

研究成果の概要（英文）：　In this study, we attempted to elucidate the structure of the college instructors’ belief by focusing on the teaching methods and ways of thinking about instructional design held by the teachers involved in the improvement of learner-centered classes due to the spread of active learning. First, we developed a teacher’s instructional belief scale aimed at improving learner-centered classes and examined its components. Furthermore, through interviews with faculty members, we qualitatively explored the relationship between the elements and examined the validity of the contents of the created scale. Finally, through path analysis, we identified four subscales of "resistance to change," "acceptance of support," "fixed view of competence," and " teaching efficacy" on teachers' learner-centered views of the class, and confirmed their influence on them. The need for teacher training based on these differences in instructor’s belief was indicated.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学教員の授業観　FD研修　アクティブ・ラーニング　学習者中心の授業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

我が国では、平成 24 年の質的転換答申以降、「アクティブ･ラーニング」あるいは「主体的・対話的で深い学び」の導入が強力に進められている。アクティブ･ラーニングは本来、講義を一方的に受講するだけの受け身の（Passive な）学習に対する Active な授業という意味であり、様々な方法で学習者の能動性・主体性を喚起する学習指導法の総称である（溝上,2014）。総称に過ぎないものをあたかも特定の教授方法があるように捉え、それと自身の授業実践と相容れないものとし、導入に対し消極的な教員は少なくない。アクティブ・ラーニングに象徴される学習者中心の授業改善に向け、どのような授業を良しとし、どのような教育成果を求めるのか、教員の授業観・教育観が新たな教育方法の受け止め方に与える影響は看過できない。

２．研究の目的

大学教員の授業観に関する調査研究に基づく教員研修は未開発である。従来、学校教育の現場では組織変容の必要性について、佐藤（1996, 2012）が提唱する「学びの共同体論」など、様々なアプローチが採られてきた。そうした試みからは、アクティブ･ラーニングを取り入れようとする教員の授業観の変容が、学校自体が持っている文化として機能しないと実質的な授業改善につながりにくいことが示唆されている。

研修は変容のきっかけであっても、授業改善を定着させるためには職場文化との促進的な相互作用が必要である。そこで本研究では、教員の授業観の実際を探り、そうした個人と組織の両面から大学教員の授業観の実際を明らかにし、実効ある授業改善研修の開発を試みる。

以下、本研究の期間中に、次の４点に取り組む。

（１）日本の大学および高校教員が抱く授業観を測る尺度を開発する。
（２）開発した尺度を用い、教員が抱く授業観の実態を把握する。
（３）授業観を分類し、授業観のタイプとアクティブ･ラーニング実践との関係を明らかにする。
（４）教員の授業観変容トレーニング法を開発し、それを用いた研修プログラムを提案する。

３．研究の方法

1年目　先行研究を精査し、大学教員の授業観に関する質問調査票を作成する。同時に、アクティブ･ラーニング（学習者中心の授業法）に関する研修に参加し、積極的に新たな手法や工夫を取り入れようとする教員と、そうでない教員の違いを聞取り調査し、その背後にある授業観を探る。

2年目　作成した質問調査票を用いたパイロット調査を行い、調査票を改良し、完成させる。

3年目　改良した調査票を用いた本調査を行い、教員の授業観を把握する。また、調査結果を踏まえて授業観尺度を完成させる。

4年目　成果をまとめ、関連学会で授業観に配慮した研修を設計・提案する。

４．研究成果

取組み初年度は、先行研究（穂屋下、他 2018）を踏まえ、質問紙調査項目を精選した。その際、従来の紙ベースの質問票に加え、Web 上で回答できる調査票を開発した。下半期、８大学１団体の FD 担当者の協力を得て質問調査を行い、約 200 名の大学教員から回答を得た。質問紙調査の結果、5 因子「変化への抵抗感」「支援受容感」「固定能力観」「授業改善志向」「授業効力感」からなる大学版授業観尺度（24 項目で構成）を作成した。この 5 つの因子の関係から、学生の能力を固定的に捉え、教育による学力向上を限定的に考える教員は、自身の教育方法を変えることに抵抗を示し、 授業改善に消極的な傾向を示すことが認められた。調査結果の第一報は 2019 年 6 月に行われた大学教育学会で発表した。
【山田嘉徳・関田一彦（2019）大学教員が抱く授業観の探索的検討―質問紙調査から見えてきた課題―　大学教育学会第 41 回大会】

二年目は、初年度の試行調査に基づき、大学教員の授業観を測る尺度を改良し、これを用いた調査を進めた。また、調査結果を参考に、10 名の教員に対し個別にインタビューを行い、教育観・授業観の詳細を尋ねた。インタビュー調査の分析から、アクティブ・ラーニングを取り入れ、学生を自立した学習者に育てようとする「授業改善志向」の背景には、「なぜ授業改善したいのか」、「授業改善を志向する自分はどのような人間（教員）なのか」、「そもそも自分には改善する技量があるのか」といった教員の持つ信念（Belief）の影響（Weiner, 2013）も示唆された。また、固定能力観と授業改善志向の組み合わせにより、変化への抵抗感および授業効力感に違いが生じる可能性が示唆された。これらの知見については 2020 年 3 月の大学教育研究フォーラムで報告した。
【関田一彦・山田嘉徳（2020）大学教員が抱く授業観の探索的検討―授業改善に対する実態と大学観に関する認識を中心として―　第 26 回大学教育研究フォーラム】

三年目以降、コロナ禍の広がりに伴い質問紙調査の実施が困難となったため、すでに蓄積したデータを用いた分析を継続した。その結果、学生の能力を決まったものと見る傾向（固定能力観）の強い教員は、授業改善に消極的な傾向が強いことが窺えた。一方、学生の能力は向上できると考える教員は、授業改善に前向き（授業改善志向）なことが示された。また、周囲から授業改善に向けた支援や承認を得ていると感じる（支援受容感）教員ほど、授業改善に前向きなことも認められた。さらに、自らの授業に自信がある（授業効力感）だけでは明らかではないが、周囲からの支援を感じる度合いが高いと、新たな教育方法を試そうとする傾向が現れることが示唆された。
【山田嘉徳、関田一彦（2022）大学教員が抱く授業観の構成の検討　大学教育学会第 44 回大会】
また、これらを踏まえ、アクティブ・ラーニング研修など授業方法の改善に関する教員研修を行うにあたり、①学生の能力は可変であり、指導法によって向上する余地があること、②新たな教育方法を試みることに大学は協力的であること、を明示することで、研修の実効性が上がる可能性が考えられた。
四年目に入り、新たに Google フォームを使ったアンケート調査を実施し、129 名の大学教員から回答を得た。これにより、調査票の項目精選が進み、尺度の安定性も再確認された。項目の精選とともに Google フォームでの調査票が完成したことで、本研究で開発した尺度の利便性が向上した。 なお、新規の調査報告に関しては創価大学に投稿・掲載された。
【関田一彦（2021）教育観・授業観調査のまとめ　学士課程教育機構研究 11　83－91】

最終年度の成果としては、これまで学会発表を行ってきた成果をもとに研究のポイントを整理した論文が大学教育学会誌に掲載された。
【山田嘉徳、関田一彦（2022）業改善に向かう大学教員の授業観・教育観の検討 ー学習者中心の教育の視点からー　大学教育学会誌 44　40－50】
また、コロナ禍の影響で調整が遅れていた高校教員対象の質問紙調査を実施した。5

校 130 名ほどの限られたデータではあるが、大学教員と同様に、授業改善に対する勤務校からの期待と自身の必要性の自覚、生徒への期待と職場から支持・支援 が、望ましい授業実践と関連する可能性があることが示唆された。この調査の成果報告は 23 年 6 月に開催される大学教育学会で発表した。
【山田嘉徳､関田一彦（2023）高校教員が抱く授業観・教育観の探索的検討 ―授業改善への示唆に向けて― 大学教育学会第 45 回大会】

研究全体としては、アクティブ･ラーニングの普及に伴う学習者中心の授業改善が大学に求められているが、当事者である教員が持つ教育観や授業に対する考え方に着目し、授業観の構造の解明を試みた。まず、学習者中心の授業改善に向かう授業観尺度を作成し、その構成要素を検討した。さらに、教員へのインタビュー調査により、その要素間の関係を質的に探り、作成した尺度の内容妥当性を検討し、尺度の一部を修正した。その上で、新たにデータを収集し、修正版の 授業観尺度の妥当性・信頼性の検証を行った。最終的に、パス解析を通じて教員の学習者中心志向の授業観に対し、「変化への抵抗感」「支援受容感」「固定能 力観」「授業効力感」の 4 つの下位尺度を特定し、その影響関係を確認した。具体的には、学習者中心の授業を指向する傾向の強い大学教員は、学生の成長可能 性を肯定的に捉えており、同僚からの理解・支援を感じている。一方、授業改善に消極的な教員は学生の能力を固定的なものと捉え、授業を通じての成長に懐疑的な傾向を示した。こうした授業観の違いによる学習者中心の改善への積極性の違いを踏まえた教員研修の必要性が示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 関田一彦	４．巻 11
２．論文標題 教育観・授業観調査のまとめ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学士課程教育機構研究誌	６．最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山田嘉徳・関田一彦
２．発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討―質問紙調査から見えてきた課題―
３．学会等名 大学教育学会第41回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 関田一彦・山田嘉徳
２．発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討―授業改善に対する実態と大学観に関する認識を中心として―
３．学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田嘉徳・関田一彦
２．発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討―質問紙調査から見えてきた課題―
３．学会等名 大学教育学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山田　嘉徳 (Yamada Yoshinori) (60743169)	関西大学・教育推進部・准教授 (34416)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関